

## エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』再考

——「人間性の解放」の社会理論として——

慶應義塾大学 櫻井隆充

### 1 目的

本報告は、人間のもっとも根底的な欲求を「ナルシズム」(narcissism)と見做すことによって、エーリッヒ・フロムの主著『自由からの逃走』(1941年)の定説的モチーフである「ファシズム批判」ないし「デモクラシー批判」という見方に「人間性の解放」という社会理論的契機を加えようとするものである。フロムによれば、人間の自由には「～からの自由」および「～への自由」の二種類が存在するが、彼において、前者はむしろ「消極的自由」を意味し、後者の「積極的自由」が評価されるべきものである。本報告は、この後者の「～への自由」にアクセントを置き、「人間性の解放」という人間の精神的レベルにおける目標を実現することが『自由からの逃走』のもう一つの理論的モチーフであるということを示す。

### 2 方法

本報告の最も重要な方法論的視点が、「ナルシズム」という精神分析的概念にアクセントを置くことである。フロムのナルシズム理論は、少なくとも、哲学的・政治学的・精神分析的(社会心理学的)レベルの三段階に分離できるものであり、その意味で極めて複雑な理論的含意を持つ。けれども、フロムの重要な哲学的方法としての「弁証法」(dialectic)に注目することによって、その理解はより明確なものとなる。すなわち、ナルシズムとは、彼において、人間の最も根源的な欲求でありながらも乗り越えなければならないネガティブな存在である。この点において、「デモクラシー批判」と「ファシズム批判」のモチーフは、彼の弁証法的視点から見れば同じ意味である。つまり、個人と社会とが己のナルシズムを乗り越えることができればデモクラシーへの道を拓くことができ、それができなければファシズムへ移行する。その意味で、本報告が強調する「人間性の解放」という理論的モチーフは、人間の精神の弁証法的葛藤の過程を意味するのであり、この点で、上記三つのレベルを横断する見方であるということができる。

### 3 結果

上記考察の結果、本報告は、『自由からの逃走』が「ナルシズム」という人間の存在論的レベルでの弁証法的問題にどのように対処すればよいのかということを経験的・歴史的・政治学的・社会心理学的なアプローチによって説明するという理論的意図を持つということを示すことができる。この視点から、「人間性の解放」とは、己の精神的な束縛から人を解放する「積極的自由」の実現過程を意味することが明らかとなる。

### 4 結論

以上の分析から、本報告は、『自由からの逃走』の重要な理論的モチーフの一つが、人間の根源的な欲求としてのナルシズムが持つ弁証法的矛盾における「人間性の解放」であると結論づける。

### 文献

Fromm, Erich (1941). *Escape from Freedom*, New York: Rinehart and Company.

Sakurai, Takamichi (2014). *Political Theory and Narcissism: Towards the Self-Reflection of Knowledge and Politics through Focusing on the Psychoanalytic Perspectives of Erich Fromm and Shōzō Fujita*, PhD thesis, Ruprecht-Karls-Universität Heidelberg.